立花 哲也

Tachibana Tetsuya［株式会社アクアイグニス 代表取締役／ヴィソン多気株式会社 代表取締役］

食とDXで社会課題の解決をはかる大規模複合リゾート施設

CONTENTS

特 集：より大きな体験価値の提供

SPECIAL INTERVIEW
立花 哲也 氏 …… 1

SPECIAL EDITION
阪神甲子園球場 …… 5
東京ドーム …… 9
三井ショッピングパーク ららぽーと福岡 …… 11
唐招提寺御影堂 宸殿の間 …… 13

RECENT PROJECTS
Suita SST：Suita サスティナブル・スマートタウン …… 15
パナソニック株式会社 草津工場 H2 KIBOU FIELD …… 17
社会福祉法人 もくば会 ビートル（生活介護事業所） …… 19

くらしは文化
旧長谷川治郎兵衛家 …… 21

＊本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：ららぽーと福岡

2021年7月、三重県中央部にある多気町に日本最大級の複合リゾート施設「VISON（ヴィソン：美しい村）」が誕生した。約119haの敷地には、ホテルやヴィラなどの宿泊施設に加え、温浴施設や農園、地元農業・漁業からの直送産品が並ぶマルシェのほか、75のこだわりの飲食店が集積。オープン以来、観光客や三重県民など、多くの人が訪れている。ここでは観光産業の振興だけでなく、開発段階から多くの企業と、地域医療や少子高齢化、モビリティ、エネルギーなど、地域が抱える課題にもDX（デジタルトランスフォーメーション）を用いて取り組んでいる。株式会社アクアイグニス 代表取締役の立花 哲也氏に、訪れる人が感動し、社会課題にも対応できる持続可能な施設とは何かをたずねた。

リゾート施設の革新は「アクアイグニス」から始まった

— リゾート施設開発に取り組まれた経緯を伺えますか。

私は絵を描いたりデザインしたりするのが好きで、県立高校から芸大への進学をめざしましたが、かなえられず、地元の建設会社に入社。その仕事が楽しく、どんどんのめり込んでいくうちに、こんな面白い仕事はないと、1994年に20歳で独立を決意。一人で始めた建設会社でしたが、社員が増え、不動産開発も手掛けるようになった2003年、後継ぎに困っていた湯の山温泉（三重県菰野（こもの）町）にある温泉旅館を買い取ってくれないかという話がありました。そこは、日帰りと宿泊がある、昔ながらの温泉旅館でした。その旅館が新名神高速道路の用地になり、隣地移転が決まった時に、どうせ建て直すなら、これまでにないリゾート施設を創りたいと考えたのです。アートやデザインが好きだったこともあり、建物のデザインにはこだわりました。もう一つこだわったのが「食」です。今でこそ温泉街に行くとおいしいお店や宿が多くありますが、15年ほど前の温泉街はどこも同じような料理で、山里でもたくさんの刺身が出てくる状態でした。そこで、地域の食材を使って腕の良い料理人が作る、食事を本当に楽しめる宿を創ろうと思いました。また、多くの女性が訪れ、平日もにぎわう施設にしたかったので、スイーツを加え、地域の食材とスイーツを中心としたリゾート施設を計画しました。それが「アクアイグニス」です。

癒しと食の総合リゾートAQUAIGNIS「アクアイグニス」　© 株式会社アクアイグニス

世界一のパティシエの協力を得て理想を実現

— スイーツのパティシエ探しに苦労されたと伺いました。

最初は近くの四日市や名古屋にあるスイーツ店のパティシエに何軒かお願いに行ったのですが、相手にもされません。そこで、どうせなら世界一のパティシエに頼もうと、人づてに辻口博啓さんを紹介いただき、東京の自由が丘にあるお店に伺いました。しかし、お会いいただけても具体的な話には進みません。当社は温泉熱を利用してイチゴも作っているので、そのおいしいイチゴを持って何度もお伺いするうちに、7度目にちょっと時間があるので昼食を共にすることができました。そこでアクアイグニスの構想を聞いていただき、「イチゴ農園を併設したスイーツの店を造りましょう」と訴えたところ、「じゃあ、現地に行こう」という運びになりました。

辻口さんが気に入られたのは、自然が豊かであるということ。また、湯温が42℃で1分間に800Lも出る掛け流しの源泉があり、当時でも湯の山温泉は年間80万人ほどお越しいただいていたので、地域住民の温泉利用も含めると事業として十分可能性があるということで、参加いただけました。

アクアイグスは2022年10月で、ちょうど10年になりましたが、おかげさまで年間約100万人にお越しいただいています。アクアイグニスがオープンして、湯の山温泉を訪れる人が20万人増え、アクアイグニスが100万人増えることで、菰野町は約200万人が訪れる町になりました。結果として、周りのお店もにぎわい、周辺のホテルや旅館の稼働率が上がったことから、「食」をテーマにした施設は地域を元気にすると、全国各地の市町村からお誘いを受けています。

VISONがめざした「食」のテーマパーク

— VISONを手掛けられたのはなぜですか。

アクアイグニスの成功を見て声を掛けてくださったのが、三重県多気町の久保行央町長でした、多気地方は昔から伊勢神宮の近くということもあり、多様な食材や薬草を生育しているので、薬草と地域の食材を生かした健康になる施設を創ってほしいということでした。多気町は東に伊勢神宮、南に熊野古道へと続く古代から交通の要衝です。伊勢神宮は式年遷宮によって観光客数が多少変化するものの、年間1,000万人近くが、この地域を訪れています。ところが、この地域は有名な観光地が多い一方で、日帰り客が多いため観光産業も振るわず、人口減少・高齢化が進んでいました。これを解決しようと2013年にスタートしたのがVISONプロジェクトです。

ここは、ゴルフ場建設が予定されていた土地で、敷地面積は約35万坪、東京ドームの24個に相当する広さです。当社だけでこれだけの施設を整備するのは大きすぎるので、三重県発祥の企業であるイオンさんのお力を借り、薬草に関しては三重県に主力工場を構えるロート製薬さんにもご協力いただきました。

菰野町のアクアイグニスでも「食」、スイーツにこだわったのですが、VISONは規模が大きいこともあり、「食」の聖地にしようと考えました。ここでは、味噌や醤油、みりんなどの発酵文化の店舗はメーカーさんに直接出店いただいて、この場で発酵食品を作り、食品を学んだり体験したりして買い物ができるという、日本の食文化すべてを集めたような施設にしました。もう一つ「食」に関しては、世界一の美食のまちとして知られるスペインのサンセバスチャン市をモデルにしようと考えました。そこは人口約18万人のコンパクトなまちでありながら、人口に比べて世界で一番ミシュランの星を獲得したレストランが多いと言われています。多気町とサンセバスチャン市を友好都市にしようと計画したのです。

情熱を持って訴えれば道は開ける

— 友好都市提携は大変だったのではないですか。

最初は大使館を通じて友好都市提携をお願いしたのですが、日本だけでも6、7件の依頼があり、世界中から同様の依頼があるが、すべてお断りしているという回答。そこで、多気町長と「サンセバスチャン市に直接行って、想いを訴えよう」と、思い切って直接訪問しました。その時も事務方から「市長への20分だけの表敬訪問です。提携は無理です」と固く念を押されていたのですが、多気町とVISONの「食」に関する資料を持って行って熱心に説明したところ、約束の時間が1時間近くなった頃に事務方が一旦退席されたので、準備していた提携書を「お願いします」と提出しました。私たちのプロジェクトに関心を示されていたサンセバスチャン市の市長は「これにサインをすれば帰ってくれるんだな」と、笑って提携書にサインをくださいました。その3カ月後、市長は多気町と伊勢に来られ、工事中の現場を見て帰られました。その後、サンセバスチャン市で有名なバル3店舗の出店が決まり、市の三つ星レストランと提携したことで、HOTEL VISONにある最上階のレストランは、正式に多気町とサンセバスチャン市の交流レストランと位置付けられました。

立花 哲也氏

1974年三重県生まれ。三重県立四郷高等学校卒業後、1993年地元建設会社に入社。1994年コウドウ建設を創業、1996年株式会社kodo.ccを設立し、代表取締役に就任。2003年湯の山片岡温泉を買収し運営を開始。並行し、2004年広告代理業、建設マッチングサイトなどの事業も手掛ける。
2012年株式会社アクアイグニスを設立。2015年ヴィソン多気株式会社設立。

地域の課題を解決するデジタル田園都市に挑戦

— VISONでは多様な実証実験が行われていますね。

VISONを計画した当初から、地域や社会の課題を解決し、地域に貢献できなければ持続可能な施設にはならないと考えていました。そこで、地域の社会課題を解決するため、多気町周辺の5つの町（大台町・明和町・度会町・大紀町・紀北町）と連携して「スーパーシティ構想」、現在の「デジタル田園都市国家構想」に取り組みました。ここの広大な敷地をフィールドにし、多様な企業にDXの実証実験場として利用いただきたいと考えたのです。

たとえば、三重交通さんは、これまで東京から熊野への路線はありましたが、伊勢や松阪とはつながっていませんでした。ところが、交通の要衝であるこの地にバスターミナルを設けることで、それぞれの地域がつながりました。また、VISONのデジタル田園都市国家構想の取り組みには約30の企業に参加いただいていますが、施設内でモビリティの自動運転を計画したり、伊勢志摩から海女さんが採ったサザエやアワビをドローンで運んだりする実証実験も計画しています。さらに、HOTEL VISONには遠隔医療のクリニックが入っていて、ドクターがすでにWEB上で約8万人登録されています。多気町にはお医者さんが4人しかいませんが、VISONに来ると8万人の専門的なドクターとつながることができるのです。

東京ドーム24個分の広さを誇るVISON　©ヴィソン多気株式会社

もう一つは地域通貨です。現在、キャッシュレスが普及していますが、利用する店舗は手数料を支払って、購買情報は東京の会社に集められ、地域にはメリットがありません。このため、デジタル地域通貨を流通させ、遠隔医療から自動運転、ドローンまでを一つのIDで完結しようと計画しています。このように、VISONは、地域の課題にDXで取り組みながら、100年も200年も続く持続可能な施設をめざしているのです。

「食」中心のコンセプトはどんな地域にも有効

— 2022年4月には仙台にもオープンされましたね。

東日本大震災後に仙台で復興のお手伝いをしていた時期があり、そのご縁もあって、地元の企業2社から、仙台市の土地利活用事業として、津波で被害を受けた沿岸部の土地にアクアイグニスを誘致し、にぎわいを創り出したいというお話がありました。そこで「アクアイグニス仙台」をお手伝いするため、仙台からVISONに10名ほどお越しいただき、1年間の研修を終えた後に、ブランドとレシピをお渡しした上で運営いただいています。

アクアイグニスとVISONは、10年がかりで造ってきました。こういった「食」をテーマとしたモデルを創るのは、これまでにはなかった取り組みだと思います。数百件の「食」のベンチャー企業に伺い、ご協力を得ながら実現しましたが、そこで得たのは、「食」をテーマにした施設は場所が変わっても成立するという確信でした。一般的な商業施設は、全国どこでも同じような施設が多いですが、「食」という視点で捉えると、そこで捕れる魚は全く異なります。同様に、栽培される野菜や果物も異なり、酒や味噌などの発酵文化も異なります。さらに、そこで活躍されている企業も違うので、地域が違えば、全く異なる施設が成立します。私たちが10年をかけて獲得したノウハウや経験を、連携して展開していければ地域を元気にできるのではないかと考えています。

— ありがとうございました。